

で明らかにしている。そういう意味で、本章は一つの離島を対象に網羅的に記述する際に参考にすべき論文であるといえる。

8章は、拡大基調にある高根県隠岐の知夫里島における肉用牛繁殖経営農家に対して、悉皆調査を行い、その経営戦略の展開を明らかにしている。小離島においては、自営業の経営はますます厳しくなっていくと考えられるが、そういった問題に直面する多くの離島に示唆を与える研究である。

9章では、漁業地理学の観点から1970年代後半に行った調査をもとにモノグラフが描かれている。筆者は、当時漁船に乗り込むなどして延縄漁業を直接観察し詳細な情報を得ており、それがいかなる意味を持ったかを「ふたたび問う」としている。20数年の時を経てはいるもののその研究が色褪せることなく活き活きと読むことができるのは、こうした書き方の工夫にあるのかもしれない。本書にはさまざまな描き方が登場するが、それらを比較するためにも本章の存在は大きいといえる。

10章で取り上げられる福岡県小呂島は、人口減少の激しい離島が多いなかにあって、人口を維持している数少ないタイプである。本章では、小呂島の人口維持に漁業と世帯の維持＝「長男が家を継承する」という規範意識が関わっていることを詳細な調査から明らかにしている。

11章は、宮崎県の島浦島のまき網操業行動を時間地理学的な分析と養殖業の実態から経済的地域構造を考察している。本章は9章とは異なる操業行動の描き方であり、比較することで分析手法の違いを理解することができる、1冊の本にこのような試みがあることは、たいへん興味深い。

12章は、兵庫県家島諸島の3つの集落を対象にして歴史地理学的に分析されている。本章は、明治前期を扱っているものの漁業という観点では前章までと一致しており、また現在の地域像を解釈するという立場から考察を行っている点も特徴といえる。そのため、研究方法や扱っている時代や島こそ異なるものの、他章やその他の離島集落への視座を持つ際に有効になる研究であるといえる。

そもそも、本書の執筆者達はそれぞれの研究を始める際、本書のような形でその成果が出版されることになろうとは予想していなかっただろう。そのため各章は本来独立した論文として成立していたものである。そのことは、本書の魅力であるが、1冊の書籍としては、本書を通しての総合的なまとめの議論が展開され

るような終章が提供されていないなどの問題がないわけでもない。そういう意味で本書は、「様々な島をフィールドにした研究のカタログ」と評するのが一番わかりやすいのではないだろうか。

ところで、評者をもっとも気になった（気に入らなかった）のは本書のタイトルである。「離島研究」は、確かに間違いではない。しかし、編者は、まえがきの冒頭でその研究対象である「島」を「離島」と呼ぶことは好きではないと述べている。その好きではない言葉をなぜ使ったのか。そこには島々が抱える今日的課題や今後ますます厳しくなるだろうと考えられる状況を考慮し、「あえて「離島研究」とした」とある。なんとも消極的である。確かに多くの離島は、人口の流出と急速な高齢化の進行にともない状況は悪化の一途をたどるかもしれない。しかし、このような時代において離島に関する研究がまとめられる際に、「こういった時代だからこそ」というようなタイトルが付けられないのだろうか。事実、本書で取り上げられた島々は、これからの時代に可能性を感じさせる島々も多かったのではないだろうか。

また、タイトルに「研究」という言葉を用いることによって一般の読者を遠ざけることになるのではないだろうか。本書は各章において、よりわかりやすく読みやすくなるような工夫が見られるが、タイトルによって敬遠されることがあるとすれば、いかんともしがたい。このような平凡な発想の裏を付いたとすれば、なんともむずがゆい思いである。

本書は、これから離島をフィールドにして研究を行うおうとする場合や、離島に限らずさまざまな研究方法について学ぼうとする場合には必読である。また、これまで離島に何の関わりもなかった方にも是非一読をお薦めしたい。

(谷川典大)

内田和子：日本のため池 ——防災と環境保全——

海青社, 2003, 270 p., 4,667円 (本体)

ISBN4-86099-209-1

ため池は、かつて日本の地理学において、重要な研究対象であった。地理学以外でも、歴史学、法学、農学、社会学などにおいて研究がなされてきた。寶月(1943)、竹山(1958)、竹内(1980)など、体系的な著書が発表され、その研究はすでに終わったものと見

なされていた。それゆえに「日本のため池」というタイトルをみて、多くの方は、今さら、なぜ、という印象をもたれるかもしれない。序文において著者は、ため池研究に着手した経緯を述べている。すなわち、従来、ため池への関心あるいは研究は、ため池の利水面のみに注目されていた。阪神・淡路大震災を契機に、ため池の災害の重要さに気づき、防災面からのため池研究の必要性を見出したのである。さらに防災面だけでなく、ため池の環境保全や親水といった多面的機能に言及した、新たなため池研究の必要性を説いている。

本書の章構成は、次の通りである。

序 論

第Ⅰ部 ため池の存在形態—分布と改廃—

第1章 わが国におけるため池の存在形態

第2章 都市化地域におけるため池の改廃

第3章 ため池の存立条件からみた農業集落の変化

第Ⅱ部 ため池の決壊による水害の地域分析

—歴史的教訓—

第4章 ため池卓越地帯における水害の事例分析

第5章 大規模ため池の決壊と浸水地域の復元

第6章 ため池の水害対策と地域の変化

第Ⅲ部 ため池と地震災害—阪神・淡路大震災の教訓—

第7章 ため池の立地と老朽度から見た被災ため池の特色

第8章 被災ため池と貯水率との関連についての検討

第9章 被災ため池の受益地における用水不足への対応

第Ⅳ部 ため池の保全—維持・管理方式の再検討—

第10章 行政によるため池の管理と保全事業

第11章 ため池の多面的機能

第12章 都市化地域における新しいため池の維持・管理方式

第13章 他目的への転用によるため池の再活用

結 論

簡単に本書の内容を紹介する。序論では、徹底した先行研究がなされており、それを踏まえて、本書の目的を、「現代におけるため池の存在形態を明らかにし、その災害の実態分析を通じて防災に対する基本的な考え方を示すとともに、ため池の新たな保全策を検討することによって、ため池地域の環境保全の参考に資することである」と設定している。この目的を達成するために、ため池の「存在形態」、「災害」、「保全」の3つのアプローチから迫ることが示されている。

第Ⅰ部は、「存在形態」からのアプローチである。第1章では、古代から現代までのため池の歴史を、た

め池の所有・管理と水利権の変化に着目して概観している。そして、ため池に関する農林省の統計をもとに現在のため池の動向を分析している。現在でも21万ものため池が存在し、その分布は日本全国に広がっており、特に、近畿、中・四国地域に多く分布していることが統計を通じて明らかにされている。第2章では、ため池数の最も多い兵庫県をとりあげ、都市化・工業化とのかかわりでため池改廃の動向を検討し、ため池の無秩序な改廃の進行を統計の上から明らかにしている。第3章は、そのため池の存立をささえる組織への検討が行われている。ここでは農業集落カードのデータをもとに考察し、ため池を維持・管理する水利共同体は存在するものの、その機能が弱体化していることを指摘している。

第Ⅱ部と第Ⅲ部は、「災害」からのアプローチである。第Ⅱ部は、過去の代表的な水害の分析を通じて、ため池の水害の特徴を考察している。第4章は兵庫県三木市と兵庫県稲美町（天満池）のため池の事例を取り上げ、第5章と第6章では愛知県犬山市（入鹿池）を事例として考察がなされている。ここでの分析の特徴は、災害を地形と史実を巧みにからませながら考察している点にある。第Ⅲ部は、阪神・淡路大震災におけるため池による災害を検討している。第7章では、ため池の立地と老朽度を指標として、被災状況の違いを検討している。その結果、谷底平野をせき止めた谷池で危険度が大きく、その一方で皿池段丘型の危険度は小さかったことを明らかにしている。第8章では、被災当時の貯水率に注目し、アンケートと聞き取り調査をもとにした考察がなされている。谷池では貯水率が高いものほど被害が少なく、その一方、皿池の場合は貯水率が高いものほど被害が大きいという事実をつきとめている。第9章では、被災後に焦点を当て、その用水不足に対して、どのような対応がなされたのかを検討している。井戸などの複数の水源による補水やダムからの送水がその対策において有効であったことを指摘している。

第Ⅳ部は、「保全」からのアプローチである。ここでは、ため池の抱える諸問題を踏まえて、ため池保全における行政の役割やその維持・管理のあり方を検討している。第10章では、維持・管理の中心的役割を果たしている行政について考察している。とくに改修事業における負担のあり方と、ため池条例などの法的規制を取り上げている。第11章では、ため池の多面的機能について検討している。ため池の機能を、「利水」（農業用水供給、食糧生産・養魚）、「環境保全」（自然

環境保全（地下水涵養・水質保全，気候緩和，生態系保全），防災（洪水調節，防火用水・生活用水），“親水”（水辺景観・アメニティ形成，レクリエーション空間形成，コミュニティ形成，文化遺産，学習・教育）に整理している。第12章と第13章は，その内の“環境保全”機能について，第12章では自然環境保全の事例として大阪府の「ため池オアシス構想」を，第13章では防災の事例として静岡県巴川流域をそれぞれ取り上げ検討している。

本書の特徴として，次の4点をあげたい。第1点は，新しいため池研究の提案とそれへの貢献である。本書を通じて，“環境保全”や“親水”の視点からの新しいため池研究の必要性が示された。すでに，この視点からの研究もいくつかみられるが（たとえば川内，2003），このような新しい視点からのため池研究のさらなる発展が望まれる。筆者は本書を，地理学からの新しいため池研究の先鞭として位置付けている。序論における先行研究では，分布・実態分析（13編），水利構造（42編），水法・水利権（14編），用水史・土地開発史（20編），歴史的研究（22編），改廃（13編），水質・水文・動植物・運用（40編），災害・防災（63編），特定地域研究（44編），ため池整備事業・水辺環境・地域資源（49編），文献解題（5編）の11部門にわたって，計325編もの文献があげられている。これは，これから新たにため池研究に取り組む者にとって，貴重なデータベースである。

伊藤・浅野編（2003）や伊藤ほか（2003）では，研究成果からの社会への提言や問題提起がなされている。本書の第2の特徴はこの点にある。すなわち結論において，「提言」として，6項目の具体的な施策が示されている。著者紹介には，著者の専門は応用地理学と記されている。このような形で研究の成果を社会に還元することは，応用地理学に限らず，これからの地理学の研究には求められているのではないだろうか。

第3の特徴は，本書がきわめて計画的に作成された点である。初出一覧をみると，本書を構成する個々の論文は，1995年から1999年にかけての日本地理学会での春季・秋季学術大会で発表され，それを踏まえて学会誌に投稿，掲載されている。また著者はこれまで，2つの著書（内田，1985；内田，1994）を発表しており，約10年を一つの区切りとする長期的な計画に基づ

いて研究が進められてきていることがうかがえる。

第4の特徴は，地理学のテキストとして活用できることである。本書では，多様な研究の方法がとられている。すなわち第I部における統計を中心とする分析，第II部における地形図の活用，第III部・IV部ではアンケート調査と聞き取り調査というように，あらゆる研究手段を用いて課題に取り組んでいる。また序論で研究のキーワード（「存在形態」，「災害」，「保全」）を提示するとともに，その関係を研究上の枠組みとして図（p.13）に示し，本論（第I部～第IV部）ではその枠組みに基づいた論の展開がなされている。そして結論では，ため池の災害と地域環境の保全フロー図（p.263）として，本研究の要約を行っている。論文の作成過程における思考方法を公開することの意義は大嶽（2003）で指摘された点であるが，本書は研究をまとめる一基本形を明瞭な形で示しており，研究方法や論文のまとめ方を学ぶ地理学のテキストとしても有用であると思われる。それゆえに，本書を水の地理学の研究者や，これからため池研究に取りくもうとする方だけでなく，研究をまとめつつある方，これから研究に着手しようとしている大学院生にとっても，非常に参考になる。是非，本書を手にとっていただきたい。

文 献

- 伊藤達也・在間正史・富樫幸一・宮野雄一（2003）：『水資源政策の失敗——長良川河口堰——』成文堂。
 伊藤達也・浅野敏久編（2003）：『環境問題の現場から——地理学のアプローチ』古今書院。
 内田和子（1985）：『遊水地と治水計画——応用地理学からの提言——』古今書院。
 内田和子（1994）：『近代日本の水害地域社会史』古今書院。
 大嶽幸彦（2003）：『人文地理学発想法入門』大明堂。
 川内眷三（2003）：大阪府下における溜池環境の特質と課題——その地理学のアプローチ——，中国水利史研究，31，pp.16-35。
 寶月圭吾（1943）：『中世灌漑史の研究』吉川弘文堂。
 竹内常行（1980）：『日本の稲作発展の基盤——溜池と揚水機——』古今書院。
 竹山増次郎（1958）：『溜池の研究』有斐閣。

（南塾 猛）